

## 讚嘆

邪見とは

邪見な者は、口を開きさえすれば、他人の悪い所や欠点ばかりとりあげて話しする。

聞きづらいものである。

傲慢な心は、口を開きさえすれば、誰をでも二束三文にこき下して、他をつまらぬ者のように貶して自分だけを賢く上げる。

聞きづらいものである。しかも我々はいつもこれを犯している。

たとえ相手が悪いにしても、不徳であるにしても、それをこき下したり、悪く言うのは、いいことではない。そのことによつてその人の徳が無くなりこそすれ、決して上りはしない。

私は近頃この事について深く考えさせられている。しかし、こうした邪見な自己を、他人がどう買ってくれたかと言うことよりも、人を悪く言つた後には、言いようのない淋しきがある。それは、煩惱の誘惑のままに動いたからであつて、魂のどん底には、それではおちつかないものがある。ほんとうの願いは、それではないからである。

他人のことをあまりに裁きすぎる人が、人の悪口を言いつつ、鬱憤うっぷんを晴らせば晴すほど、暗い顔、嫌な顔をしているのは、そうすればするだけ魂の願いを裏切つていくからである。そうすることが衷心の願いではないからである。邪見傲慢は心のほんとうの願いに反することではあるまいか。

美しきもの

大地の上には、いかなる時、いかなるところにも必ず徳の華が咲く。徳の華こそ、美しくもまた尊きものである。

それと共に尊きものは、徳の讚嘆、法の讚嘆、人格の讚嘆等、讚嘆の声である。

徳を讚嘆する人の周囲には、更に美しい華が咲く。徳の讚嘆者は徳の華の栽培者である。

「前任上人……御夢御覽候。御堂上壇南の方に前々住上人御座候て……前任上人へ対しまいらせられ仰せられ候。『仏法は讚嘆、談合にきはまる、よくく讚嘆すべき』由仰せられ候。それに付いて仰せられ候ふは『仏法は一人居て悦ぶ法なり。一人居てさえ尊きに、まして二人より合はゞいかほどありがたかるべき。仏法をばたゞ寄合く談合申せ』の由仰せられ候なり。」（御一代聞書）

喜ぶ者は、喜ばせ、讚嘆する者は、讚嘆させる。

百の議論より、一の讚嘆こそ、仏法の華を咲かせる。

花は独りいて咲き、念仏行者は「一人居て悦ぶ。」一人居て念仏相續し悦ぶに至つて、一人前の念仏行者であり、人間である。「一人居てさへ尊きに、まして二人より合はゞ、いかほどありがたかるべき。」一人居て悦ばれざる者、幾人集るとも、み法の華園は生れず。

如来の讚嘆者は、如来の徳の華園の人である。彼はたとえ未だ念仏せざる人に対しても、この讚嘆の心をもつて向う。それ故に、彼の周囲には、新しい華が咲出るのである。美しき人格をほめるかわりに、念仏せざる人をば罵倒するが如きは、未だ如来の心を知つたものではあり得ない。

如来を讚嘆する者は、諸仏によつて讚嘆せられる。

### 徳への開眼

聖賢も時に、凡夫の悪罵嘲笑の的となることあり。

悪人凡夫も時に、愚者の賞讃の的となることあり。

念仏の行者は、村に開く上上華であり、街に咲く希有華である。しかるに、念仏行者もまた罵られる。

和讃に曰く、

五濁増のときいたり 疑謗のともがらおほくして

道俗ともにあひきらひ 修するをみてはあだをなす

有情の邪見熾盛にて 叢棘刺のごとくなり

念仏の信者を疑謗して 破壊瞋毒さかりなり。

五濁の時機いたりては 道俗ともにあらそひて

念仏信ずるひとをみて 疑謗破壊さかりなり。」

聖人の御在世すでに然りであつた。衆生の邪見はますます盛り、あたかも叢や林の如くしげく烈しくなり、毒の刺ある棘の如く恐ろしく、念仏の行者を見れば、疑い謗り2で、これを瞋り打ち壊さんとして増長する。

善導大師は『法事讃』に、

「五濁増する時、疑謗多し。道俗相嫌ひて、聞くことを用ひず、修行するもの有るを見て、瞋毒を起し、方便破壊して競うて怨みを生ず。」

と仰せられた。聖者は誰も彼も、この瞋毒の叢棘刺の間を歩みたもうたのであつた。聖者は、邪見の衆生をこそ悪みたまわず、これをその慈悲海に抱きたもうに、凡夫はそれを知らず、かえつてその肉を刺す棘刺となる。世間の大燈明を滅さんとする悪逆となつて世にはびこる。

徳に向つて開眼せられざる凡夫は、いつの世にも、その最大の恩人を配所に送り、血を流さしめ、やがてこれを葬り去らんとした。聖者は、その中に無碍道を展開し、法を生き、道を讚嘆してその徳を發揮した。

徳に対して盲目なるもの、これを凡夫といい、徳に開眼した者、即ち菩薩である。信心とは如来の徳への開眼である。

### 愚悪を知れ

信心の行者は念仏の人である。称名念仏して、身をもつて如来の徳を讚嘆して生きる。

我等は、ごごかしく議論して仏法を弄び、智者ぶるが故に頭を下げず、称名念仏せざる人よりも、素直に頭を下げた念仏する愚者の方に心を奪われる。

称名讚嘆は愚者の大行である。

学んでます〜愚者となり、聞いていよ〜悪人に至る。

久遠の真実、胸中に顕現したもう。内に底に沈潜すれば、内に愚悪我慢の塊みつるに、何で区々たる議論にとどまられよう。

大聖龍樹念仏したもう。天親、曇鸞両菩薩念仏したもう。聖善導念仏し、聖人また念仏したもうに、悪逆の凡愚、念仏せず。恥ずべし。痛むべし。

褒貶を越えよ

功德の成就するところ、必ず、大千感動してやがて人を動かさし、讚嘆の声は自然におこるであろう。しかし讚嘆の声を予想して為されたことは、すでに悪魔の仕業であつて、真実の功德ではあり得ない。

讚嘆を求むる者は、たとえ一時は一道を精進すとも、その周囲これを称讚せず、かえつて悪罵に見舞われるや、道を棄て、退転して邪道に迷惑するであろう。まして、いかなる世界にも讚嘆はあり得るが故に、その安価なる讚美に心引かれて、向上進展なく、ついに為すことなくして一生を終るであろう。されば、真実一道を生きんとするものは、毀誉褒貶を越えて、如来招喚のままに、教えの如く歩みきるをもつて、生命としなければならぬ。悪魔は必ず、名利の煩惱につけ入つて、その甘心を買ひ、その人を迷路に誘う。されば、如来聖人、善知識の護念証誠に生きて、世の讚美を求むることなかれ。

一道

ああ。如来の光明、法界に輝いて暗に業苦に泣く衆生をして、如来を讚嘆する歓喜の人となしたもう。求めざるに与えられたる真実教は、讚嘆すべき唯一のものを知らしめたまいぬ。何を褒むべきかの解決は、ついに人生そのものの解決であり、道そのものの解決であつた。

報謝の生活、未だ微塵も成就せざるに、恩徳洪水の如くあふれ、邪妄内に充つるに、浄華の衆、我を囲む。

誠むべし我が心、讚嘆の声をつかんで浮き上り、非難の聲に怒つて沈まんとす。されど我に念仏ありて一道開く。如来を仰ぎ、仏徳を讚嘆して、一生を過ぎん。幸なるかな。